

公表

## 事業所における自己評価総括表

○事業所名	ステラNEXT			
○保護者評価実施期間	令和7年 4月 1日		～	令和8年 2月 28日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	19名	(回答者数)	19名
○従業者評価実施期間	令和7年 4月 1日		～	令和8年 2月 28日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	6名	(回答者数)	6名
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年 3月 26日			

## ○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	家庭・学校との連携に力を入れている 具体的には、不登校児に対して「個別サポートⅢ」を取得すると共に家庭・学校との情報共有を行っている。数年、不登校だった児童が少しずつ学校に行けるようになった	本人・保護者のニーズのみならず、学校側の要望に対しても仲介する事で不登校で相互の関係が希薄にならずに繋がりを保てるように意識している。実際に登校支援、学校見学等、本人・保護者・学校と連携する事で不登校を解決できるように努めている	思春期に入る児童が多く、学校生活や交友関係に葛藤を抱きやすくなっている。不登校となる前に、本人の様子をしっかり見極めながらサポートに徹していく
2	事業運営(活動の立案、工夫、取り組み等)を職員が一体的になり取り組んでいる 職員一人一人が能動的に動き、常に連携を図ることでより良い事業運営を常に意識している	活動内容を立案する際、偏りや固定化がないように様々な工夫を取り入れている。児童の特性に合わせた内容、楽しみながら参加でき、且つ効果的に作用する内容を日々検討している。 職員それぞれが持っている専門性、得意分野を活かし、職員間で連携、助言を行っている	職員一人一人が自己研鑽を怠らざに行い、より良い事業運営を目指し、支援に対する高い志を持った運営を目指していく。具体的には、専門的な外部研修に積極的に参加、送り出しを行っていく
3	地域との繋がりを大切にし、年齢や障がいの有無に関わらず地域の一員として関われる環境作りや配慮を行っている	インクルージョンの視点から活動内容に「地域交流」を取り入れている。学童期から思春期に入る児童も多く、身体的、精神的、情緒面で葛藤を抱きやすい時期の児童が多い。放デイのみの関わりだけでなく、地域との繋がりを感じ、孤立しない、誰かを頼れるような社会性、協調性を育めるようサポートを行っている	年齢が上がるにつれて、「児童センターで遊ぶ」ことは少なくなっていく中、立ち寄れる場所、頼れる場所として認識できる社会資源の発掘を常に続けていく必要がある。事業所が所在している地域のみならず、様々な地域に対する「地域交流」の機会を増やしていきたい

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	ペアレントトレーニング等の実施	保護者が参加できる内容の外部研修のお知らせを行っているものの、自事業所では開催に至ることができていない。 児童の成長に伴い、支援の思い、見えている課題等を含め、家族へ伝えたりすること、関わり方へのアドバイス等、情報共有の場を積極的に設けていく事を考える	ペアトレの実施には至っていないが、全保護者向けに情報提供の場として「活動報告会」の開催を検討中。次年度内では実施ができるよう取り組んでいく その他、年齢によって生まれてくる課題、個人の特性による課題等、様々な着眼点の中で家族支援プログラムの運営を検討していく
2	生活空間の構造化等の工夫	事業所内には児童が見やすい位置にわかりやすい内容の掲示を行っている。構造化を意識する事で各々が考え、行動出来る環境作りを行っているつもりだったが、まだまだ足りない事の認識を得た。今後は掲示物の整理を行うと共により効果的且つ構造化に着目した内容の環境作りを検討していきたい	高学年が多い事業所となっている為、生活空間には馴染みのある漢字等を多く取り入れている。そのかきもあり、自身の名前を漢字で書けるようになった児童もいる。身近なものへのふれあいと共に自身の生活力を高めていけるような構造化にも配慮していきたい
3	父母の会の活動、きょうだいや親子の交流の場の設定はあるものの、周知がまだ足りない	毎年恒例となっている「親子バーベキュー会」では、多くの保護者や家族の参加を頂いている。その中で保護者間の交流やコミュニケーションをスタッフが仲介する事で、関わりが持っていると持っていたが、まだまだ認識してもらえていない様子	年1回の交流だけでは少ないと感じる。「親子バーベキュー会」以外にも、保護者が認識したり、参加できた内容を、もう1、2回計画していきたい。上述のペアトレの様に、様々な視点を大切に開催を積極的に検討する